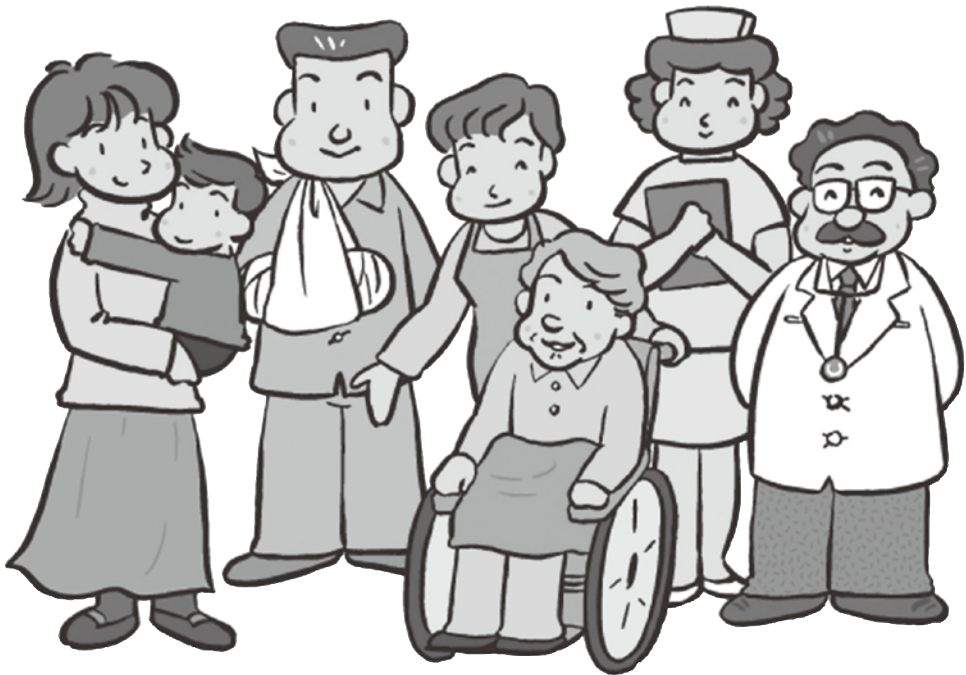


第52回 むつ市福祉作文コンクール

第8回 下北郡福祉作文コンクール

優秀作品集



主催 社会福祉法人むつ市社会福祉協議会
むつ下北地域社会福祉協議会
後援 むつ市教育委員会
下北国語教育研究会
一般社団法人公済会

第52回むつ市福祉作文コンクール 第8回下北郡福祉作文コンクール 開 催 要 項

- 趣 旨** 少子高齢化の急速な進行に伴い、核家族化の進展、女性の社会進出の増加などを背景として、児童や家庭を取り巻く社会環境が大きく変化しているなかで、次代を担う子ども達が福祉の心を持つことは、とても大切なことであると思われまます。ついては、この福祉作文を通して人間性豊かな子ども達の成長を期待し実施いたします。
- 主 催** 社会福祉法人むつ市社会福祉協議会
むつ下北地域社会福祉協議会
- 後 援** むつ市教育委員会 下北国語教育研究会 一般社団法人公済会
- 日 時** 令和4年2月5日(土) 14:00～15:00
- 会 場** むつ市中央公民館 講堂
むつ市大湊浜町13番1号 電話0175(24)1224
- 作文内容** 高齢者、障がい者、家族及びボランティア活動等
「思いやり、いたわり合い」について書かれた内容であること。
- 参加者** 入賞児童・生徒及び保護者、関係教職員、
むつ市社会福祉協議会役員・評議員、むつ下北地域社会福祉協議会役員 他
- 日 程**

開 会		
主催者挨拶	むつ市社会福祉協議会会長 むつ下北地域社会福祉協議会会長	遠 藤 雪 夫
表彰状授与		
お祝いの言葉	む つ 市 長	宮 下 宗一郎 様
〃	む つ 市 議 会 議 長	大 瀧 次 男 様
優秀作文朗読	最優秀賞受賞者5名	
審査講評	下北国語教育研究会会長 むつ市立第二田名部小学校校長	氣 仙 宏 様
閉 会		

目

次

講 評 審 査 を 終 え て

下北国語教育研究会会長
むつ市立第二田名部小学校校長

氣 仙 宏 1

最優秀賞の部

みんなありがとう

第三田名部小学校 五年

山 本 幸 4

僕にできる事

むつ 中学校 一年

篠 崎 日向斗 5

私にできること

大湊 中学校 二年

濱 田 琉 衣 6

個性を尊重して

大湊 中学校 三年

北 本 結 羽 7

幸せの両立

田名部 中学校 三年

齊 藤 遥 太 9

優秀賞の部

ぼくのおばあちゃん

大平 小学校 三年

佐 藤 唯 翔 11

治療法の無い難病

田名部 中学校 一年

高 橋 こはく 11

思いやりの輪

大湊 中学校 二年

井 上 涼 帆 13

自慢の妹

近川 中学校 三年

村 松 優 冷 14

パラリンピックから考えること

大湊 中学校 三年

外 崎 新 15

佳作の部

バリアフリーとは
笑顔を広める仕事
祖父母への感謝
本当の優しさとは
勇敢で誠実な者に

近川	鍋谷
中学校	圭
一年	
大湊	佐藤
中学校	海翔
一年	
大畑	佐藤
中学校	由奈
二年	
むつ	大館
中学校	姫星
三年	
大湊	吉田
中学校	風和
三年	

22 21 20 19 18

講 評

審査を終えて

下北国語教育研究会会長
むつ市立第二田名部小学校校長

氣 仙 宏

令和2年に開催予定だった東京オリンピックが新型コロナウイルス感染症の世界的な流行のために1年延期となり、東京都で緊急事態宣言が出されている中、令和3年7月に無観客で開催されました。多くのスポーツイベントや文化的イベントが無観客開催を余儀なくされ、中止となったイベントも数多くありました。むつ下北管内の小中学校では、一学期に予定されていた修学旅行を二学期に延期した学校も多くありました。

そのような中で、第52回むつ市福祉作文コンクール（第8回下北郡福祉作文コンクール）が開催され、多くの応募作品と出会えたことを大変うれしく思っています。様々な社会活動に制限がかけられ、あれもできない、これもできないという負のスパイラルが長期にわたって続く中ではありましたが、前向きな生き方・考え方が綴られた作品が多くみられ大変嬉しく思いました。

審査に当たっては、何気ない日常生活の中で、福祉に関わる問題への気づきについて、どのように自分事として受け止めたのか。それが、書き手の「心の奥底からにじみ出てきた魂のこもった文章」や「光る言葉」で自分のものとして表現されているかということに力を置いて審査させていただきました。

小学校では家族や祖父母、学校の友だち等の身近な人とのふれあいを通して得たことや、道徳の時間で学習したことを踏まえて考えたことや実践したことを、素直に自分の言葉で綴った作品が多く、その子らしさが表現されている作品が多く見られました。

また、中学校では、今年の東京オリンピックの基本コンセプトにあった「多様性と調和」、「未来への継承」が影響したかのような多様性や未来志向の考え方の作品が見られ、子ども達の見方・考え方の進化を感じました。

こうしたことから、「すべての人が、それぞれに人間として豊かに」というノーマライゼーションの考え方が確実に浸透している

こと、そして、学校生活の中では障害のある子どもと障害のない子どもが共に教育を受けることで、「共生社会」の実現に貢献しようという考え方であるインクルーシブ教育が進んできたことも感じさせられました。

人々の生活様式を変えた新型コロナ感染症は未だ終息せず、間もなく三年目に入ろうとしています。制限をかけられた学校生活が続いている中、それでも子ども達のもつ優しさ・温かさを感じる作品に数多く出会うことができ、大変幸せな気持ちになることができました。

人は人との関わりの中で成長すると共に、自らの思いを文章に綴ることを通してまた成長します。審査員の一人として確実に成長した書き手のみなさんと作品を通して出会えたことに心より感謝いたします。

◆第三田名部小学校 五年 山本 幸 「みんなありがとう」

生まれたときから障害を持つ作者が、自分の記憶にはない幼い頃の死と隣り合わせになった経験を親から聞いたり、動画に残された幼い頃の映像を見ることで当時の自分を客観的に捉えます。そして、今は元気に過ごせるようになった作者に残る傷に両親がかけてくれた言葉が「みんなありがとう」につながります。

◆むつ中学校 一年 篠崎 日向斗 「僕」の事

作者の母は、十万人に一人が発症するという難病を患いました。作者が生まれる前に発症し、現在も治療を続けています。奮闘する母の姿を見て、「自分自身が難病を抱えている人と、その家族を助ける仕事に就きたい」と決意します。前向きに進んでいこうとする作者を、心から応援したくなる作品です。

◆大湊中学校 二年 濱 田 琉 衣 「私」の個性」

作者は、飲食店を営んでいる祖母との関わりから、高齢者に対する本当の「優しさ」とは何かを深く考えて行動していきます。それは、身体の衰えによってやりたいことを制限したり我慢をしいたりすることではなく、祖母がこれからもいきいきと「生きがい」をもつて働き続けられるように、共に支え応援していくことだったのです。福祉の理念に触れる素晴らしい作品です。

◆大湊中学校 三年 北 本 結 羽 「個性を尊重して」

生まれつき左耳が聞こえない作者が、周りの人との関わりを通して、自分の境遇を「個性」と捉えられるようになり、さらに何気ない出来事にも感謝の気持ちを持つこととなります。自身の成長も大事ですが、周りの人の少しの思いやりや差別をしない気持ちの大切さを感じさせる作品です。

◆田名部中学校 三年 齊 藤 遥 太 「幸せの両立」

共働きの両親を持つ作者は、両親の働く姿から働くことと子育ての苦労を考えるようになります。それでも両親への感謝の気持ちを忘れず、さらに「子育て」について、親と子どもと社会の三者による新しい形を考えています。皆が協力してえられる「幸せ」について考えさせられる作品です。

◇審査員 下北国語教育研究会

氣 仙 宏 校長（むつ市立第二田名部小学校） 木 村 浩 明 教諭（むつ市立大畑中学校）

平 沢 和 哉 教諭（東通村立東通中学校） 根 上 愛 美 教諭（むつ市立田名部中学校）

最優秀賞

みんなありがとう

むつ市立第三田名部小学校 五年 山 本 幸

私は生まれた時から、障害があったそうです。生まれた時のことは、ほとんど覚えていないため、お母さんに聞いてみました。私の病気は気管という空気の通り道が、すぐくせまくつぶれていて通りが悪いため、息が出きなくなってしまう病気だと教えてもらいました。お母さんの話では、私は入院をたくさんし、救急車にも乗ったし、ドクターヘリにも二回乗ったそうです。一番びっくりしたのは息が出きずに死んでしまいそうな時が二回あって、お母さんはそのたびにこわい思いをしたそうです。

私は七ヶ月頃から二年生まで、のどの穴を開けて、カニューレというものを入れていました。小さい時のことは覚えていないので家のパソコンで写真や動画を見る時があります。そこでは泣いても声が出ない自分、入院してベッドの中で遊んでいる自分、具合が悪くてねている自分など、いろいろ

るな自分がいました。今、自分の小さい時のすがたを見ると、自分じゃないようで心配な顔だったりひとりひとりでちりようをしている姿を見たらさみしそうだなぁと思いました。

カニューレは二年生の夏休みに取ることができました。のどには、カニューレの穴をとじたあとが残っています。お母さんは、幸が生きるためにがんばったしるしだと言い、幸が元気に暮らせるように、いろんな人が応援してくれたと教えてくれました。お父さんは感謝の気持ちを忘れないようにと言います。

今、元気にすごせることを考えると、ありがとうを伝えたい人はたくさんいます。

むつ病院や弘前大学の先生やかんごしさんは、幸が死にそうになった時や苦しんでいる時、助けてくれてありがとう。保育園の先生、具合が悪くならないように、いつもそばにいてくれてありがとう。学校の先生、障害があってもみんなと同じに見守ってくれてありがとう。みちのく訪問かんのみなさん、毎日学校に来て幸のことを見守ってくれてありがとう。五年生のみんなカニューレをつけていても、こわがったりバカにすることなく仲良くしてくれてありがとう。

私はみんなのおかげで、こんなに元気にすごしています。みんなありがとう。

僕にできる事

むつ市立むつ中学校 一年 篠崎 日向斗

ぼくの母は、「多発性硬化症」という十万人に一人がかかる難病です。

二十四才の時に親指がしびれてきたそうです。でもその時は、銀行で働いていたので、お金の数えすぎでしびれていると思つて何もしなかつたそうです。でも徐々に悪化して、歩けなくなり、病院に行くことになりました。その日はちょうど青森県立中央病院から先生が来ていて、診てもらつたそうです。しかし、原因がわからず、そのまま、青森県立中央病院に入院することになりました。

毎日毎日、色々検査しましたが、なかなか何の病気なのかわからず、モヤモヤしたまま過ごす日々が続きました。そして一ヶ月くらい経つた頃に、母の「お風呂に入るとしびれが強くなる。」という言葉を聞いて、「多発性硬化症」だとかつたそうです。

この病気は林家こん平さんという落語家がかつたことで知られるようになりました。こん平さんは、落語家にとつて大切な声が出にくくなり、「ちゃんらん」が言えなくなりま

した。そして、体がまひして、歩きにくくなりましたが、人によつて病気の症状は様々で、目が見えなくなったり、寝たきりになったりすることもあるそうです。母はこの二十一年で何度も入院しました。

赤ちゃんができると再発する可能性があると言われていましたが、どこかで自分は再発しないと思つて僕を産んだそうです。ですが、言われた通り、産んで三ヶ月後、再発してしまいました。点滴をしたり、薬を飲んだりすると、赤ちゃんに母乳をあげられなくなるからと言われて、治りようを始める前にいっぱい母乳を冷凍したそうです。それから僕が生まれて最初の入院になりました。

二回目の入院は、僕が三才の時でした。何度も再発すると悪化していくので、再発予防のための注射を自分でお腹や足に打つ練習をするためです。母は注射がきらいなのに、一日おきにしかも自分でしなければならなくなりました。針が見えているとどうしてもできない母のために、注射を中に入れてボタンを押すと体に針がささる道具を使うことになりました。ボタンを押さなければならぬことがいやだったそうです。でもこれをしなければ子供に会えないと思つて頑張つたそうです。

この頃のことは全く覚えていませんが、三回、四回と入院すると、他の友達は母親といることがふつうなのに、僕は会

えない日が続くとさびしく思うことがありました。

最近は去年の三月と七月に入院しました。学校や塾の予定をみて調整し、退院を早めてもらったりしているのです、なるべく自分でできることは親に頼らないで自分でやると決めています。

いつか母の体が不自由になった時に助けられるように、たくさん勉強して、母のような難病をかかえている人とその家族を助ける仕事につきたいと思います。僕が元気に成長し、立派な大人になって母を安心させることが一番の薬になると思うので、これからも母といっしょに力を合わせて頑張っていきたいです。

私にできること

むつ市立大湊中学校 二年 濱 田 琉 衣

私の祖母は、飲食店を営んでいます。今年で七五歳になる祖母ですが、

「働くことが私の生きがいでもあるから、まだ続けて生きてい。」
と言っています。

そんな祖母ですが、最近、疲れた表情を見せることが増え

てきたような気がしてなりません。腰をさすったり、体の痛みを私に訴えてくることも多くなりました。そんな祖母のことが気になって、私は祖母に一度こう聞いたことがあります。

「これからお店を続けられる？」

すると祖母は少し困ったような表情を浮かべ、

「体がもつ限りはねえ……。」

と悲しげに声を発したのを、今でも鮮明に覚えています。

あんなに働くことが生きがいであると言っていた祖母も、最近ではやはり体の衰えを気にしているようで、私はとても心配になりました。働くことが祖母の生きがいであるのならば続けてほしいという思いはあるものの、体にこれ以上負担をかけてほしくないという気持ちもありました。

そこで私は、祖母の負担を減らすために自分ができることは何か、考えてみました。少しでも祖母の体への負担を軽くし、いきいきと働いてほしかったからです。

まず、重い荷物や買い物の際のカゴを私が持つてあげるように心がけました。「それは私がやりますよ」と祖母に何度も言われましたが、無理矢理でも私が代わって持つようになっています。

冬は、祖母の自宅の前の雪かきを私が代わっています。昨年ほど雪が多く、大変でしたが、少しでも祖母の力にな

れたらという強い思いで頑張ることができました。そんな雪かきの最中に、祖母のお店にやってきたお客さんから、

「頑張るねえ。えらいねえ。おばあちゃんのためにも頑張つてね。」

と言われたことがありました。そのような周りの人たちからの温かい励ましの声と、私の祖母に対する強い思いで、仕事をまっとうすることができたのです。

この他にも、私が祖母にしてあげるべきことは身の回りにたくさんあふれているでしょう。それらを拾い集めたら、祖母は今よりずっと働きやすくなると感じています。

今の世の中を見ると、高齢者の身体的負担を減らすためにと理由づけして、お年寄りに、やりたいことを我慢させている傾向が少なからず見られます。でも、私はそのやり方には反対です。無理のない程度に体を動かすことが健康につながると考えます。高齢者のためにできることは何か、若い世代の一人一人がもっと深く考え、行動に移すべきです。そうすることで、高齢者もいきいきとやりたいことができ、暮らしやすくなると思うのです。高齢者に対する「優しさ」とは、やりたいことを制限したり我慢を強いったりすることではありません。自分たちが支えになつて応援することなのだと思うのです。

福祉というと、老人ホームや、障がい者施設での介護と

いった場面を思い浮かべる人がほとんどかもしれませんが。でも、それはちがいます。人はだれでもやがて年をとります。他の人の支えをだれもが必要とします。そう考えると、身近な人への気配りこそが、福祉の理念に触れる第一歩だと私は思うのです。

個性を尊重して

むつ市立大湊中学校 三年 北 本 結 羽

僕は生まれつき、左耳が聞こえず、形も普通の人とは違います。ですが、右は聞こえるので普段の生活を送る上では特に支障はありません。

幼いころ、僕は母に「僕の耳は何でこんななの？」と聞いたことがあります。すると母は「そういう病気だから仕方ないのよ。でも、他の人の中には生まれてくることさえもできない子もいるから、感謝するべきなのよ。」と答えました。そのころの僕は、何の病気も持たずに生まれた人はもつと感謝するべきだと、反感を抱いていました。

それから時が経ち、小学生になると、学校を休んで通院することが何度ありました。行きたくなくても通院せざるを得ない僕は、まわりの人は耳も聞こえて、形も普通でいいな

と、ふと愚痴をこぼしてしまいました。そのとき、母の言葉を思い出してはつとしました。自分の考えがどれだけ浅はかでだめなことだったかがわかりました。

小学校高学年のときに担任の先生が言いました。「人にはそれぞれ個性があつて、強い個性の人だっている。けど、その個性を短所と考えるのか、それとも特性として生かすのかは君たち次第だ。」と。これを聞いて僕の考え方は変わりました。僕のこの耳も個性であつて、けつして悪いものではないと思いました。こういうことは他のどの人にもあてはまることなのだと思います。

中学校に入学してから、二回手術のため入院しました。退院して久しぶりに学校に行くと、そのときは体育祭の練習でした。何もわからない僕に先輩や仲間が嫌な顔をせずていねいに教えてくれました。このとき僕は、耳のことを一番気にしていたのは自分のゆがんだ心だと気づきました。そして同時に、それまで普通に接してくれた人たちのありがたさに気づきました。

これらの体験を通して、僕には学んだことがあります。それはたとえどんな状態で生まれようとも、生まれてきたことに感謝するべきだということです。こうして生まれてこなければ、人と話したり笑ったりすることができなかつたはずです。何らかの形でこの世に生を受けられなかつた人たちがい

ることを心に刻み、毎日に感謝するべきだと思います。

そして、一人一人相手の個性を尊重することが大切だということも学びました。例えば体が弱い、病気をかかえているなどはその人の個性であつて欠点ではありません。

僕は親や友人、学校の先生など、自分と関わつてくださる全ての人に感謝するべきだと反省しました。なぜなら、いろんな人に気をつかつてもらつたり、ご飯をつくつてもらつたり、勉強を教えてもらつたりすることで毎日を明るく過ごせるからです。

この先僕はこの左耳のことで何か嫌なことがあつてもくじけません。だれも恨むことなどせず、むしろまわりの環境に感謝していきたいと思います。この耳を大事にします。他の人の耳をうらやむようなことはもうしません。一種の個性だと思つて普通に関わつていきたいです。

最後に、新型コロナウイルス感染症が流行している今、気になっていることがあります。ウイルスに感染したかしてないか、ワクチンを打つたのか打っていないのかでの差別や偏見があることです。コロナウイルス以上に、それは怖いことだと感じています。人としての優しさや気高さを失うことなく、差別的な考えにNOの意味をつきつけて過ごしていきたいと思つています。

幸せの両立

むつ市立田名部中学校 三年 齊 藤 遥 太

「子供は自分の手で育てたい。自分の手で育てなければ。」そんな母親の誓いを耳にすることがある。でも、それは絶対なのだろうか。仕事と子育ての両立を目指す親は、まず育児休暇を取り、やがて保育園に預け、「小一の壁」にぶつかるとこの壁の越え方を間違えると、子供は家族を知らずに育ってしまう。

僕の両親は中学校教師だ。二人とも帰りが遅く、夜八時を過ぎても帰らないことも多い。その時間まで預かってくれる学童保育はなかなかない。でも、共働きをやめてしまえば家計に影響を与えるし、親には親の生きがいや人生、やりがいもある。

そういう環境の中、僕は個人による「認可外保育施設」に預けられた。そこは名前ほど堅苦しい場所ではなく、「仲良しの近所のおばさんの家」という感じだった。学校からその「近所の家」に帰り、宿題をやり、夕飯を食べて、親を待つ。生活に規則正しいリズムがあったし、家に帰ると人がいるという安心感もあった。そこには一ヶ年下の男の子がい

て、よくブロックなどで遊んだ。夏休みは預け先のおばさんと出かけたりもした。小学校六年間を共に過ごしたその人達を、僕は「もう一つの家族」だと思っている。

自分の面倒を見てくれる大人がいけないというのは、子供にとって大きな不安だ。ある日、その預け先の家の都合が合わず、僕は学校から三キロメートルほど離れた自宅に歩いて帰った。いつもと違う通学路、いつまでも着かない自分の家。僕は今自分が一人であることを強烈に自覚した。気づけば行き交う車の中に父の車を探していた。辺りが薄暗くなつた頃、ようやく自宅についた。「おかえり」の聞こえない家で、「もしもう一つの家族がいなければ、こんな毎日だったんだ」と思った。

日本では、「母が子を育てる」ことが常識とされてきた。でも、今は時代が違う。大切なのは、「親も子どもどう幸せに暮らすか」ということだ。僕はその選択肢の一つとして「子供を預ける」ということを提案したい。親の立場からすれば、「逃げ」と思うかもしれないが、僕はそうは思わない。

僕の母は仕事熱心で、夜十時を過ぎても帰らないこともよくあった。僕が母に会えたのは、朝起きてから学校に行くまでの一時間だけ。もしも僕が生まれたと同時に退職していたら、その時間は何倍にもなっただろう。夕飯となるコンビニの総菜を出すとき、父はいつも申し訳なさそうにしていた。

それでも、僕が両親への感謝を忘れたことは一度もない。休日は家族で一緒に出かけ、楽しい時間を過ごした。時々仕事が早く終わった時は急いで帰ってきて、たくさん話を聞いてくれた。僕は、両親が教師という仕事に誇りを持ち、一生懸命に働いていることを理解し、尊敬していたし、それ以外の時間は全て僕のために労力と愛情を注いでくれていたことを感じていた。何か特別なことをしなくても良い。ご飯は毎日総菜でもかまわない。日々のちよつとした時間に子供のことを大切にしたり、少しでも子供との時間を増やそうと努力する姿勢があつたりすれば、子供はきちんと受け止められると思う。

僕は、「子育て」というものは、親と子供、そして社会の三者が共に苦悩し、苦勞し、それぞれの幸せのかたちを見つけていくものだと思っている。親だけが全ての苦勞と責任を背負い込み、どうにかしようと苦しまないでほしい。辛いときは辛い、子供に相談し、共に乗り越えていく方法を考えることが大切だ。その際、母子生活支援施設、乳児院、児童養護施設、認可外保育施設など様々なサービスを利用することも良いと思う。

古い考えに囚われ、誰かの犠牲で誰かが幸せになるのではなく、皆が協力して「幸せの両立」をできる社会であつてほしいと願う。



優秀賞

ぼくのおばあちゃん

むつ市立大平小学校 三年 佐藤 唯翔

ぼくのおばあちゃんは何年か前からかるといって、いんちしようです。

四月二十五日、買い物から帰って来た時にげんかんを上がった所でころんでしまいました。「ドーン」ものすごい音がして見に行くとおしりをつけていました。はじめは、

「そんなにいたくないよ。」

と言っていましたが時間がたつと歩けなくなったのでびょういんに行きました。右足のつけ根のこっせつでそのまま入いんになりました。入いん中はコロナもあっておみまいに行けずスマホも持ってないので、話ができないじょうたいです。ベッドでねていることが多いので家ぞくみんなにんちしようがすすむ事を心ばっていました。

七月に入り、足がよくなってきたのでたいいんで行ける事になりました。ぼくは、ひさしぶりに会うことができてうれし

かったです。おばあちゃんは思ったより元気でしたが、ぼくの事を一年生だとかんちがいてびつくりしました。長く入いんしてにんちしようがすすんだのかなと思いました。足のほうは前のようにしゃがんだり正ざしたりできなくなつたのでひじつきのいすやおふる用のいすなどをじゅんびしました。ぼくはまたころんだりすべったりしないか心ばいでおふるに入るのをてつだいました。まい日手つだうのはとてもたいへんです。かいごのおしごとをする人は、もつと大へんだと思いました。

ぼくの学校ではちようどにんちしようのべんきようをしました。(おどろかせない)、(いそがせない)、(心をきずつけない)この三つの「ない」をならつたのでこれからも気をつけて手つだいでいきたいです。

治療法の無い難病

むつ市立田名部中学校 一年 高橋 こはく

私には、一つ上のいとこがいます。その子は、少しやつかない病気を持っています。

私のいとこは、日本国内で数十名の、治療法が見つからない難病「毛細血管拡張性運動失調症」です。「毛細血管

「拡張性運動失調症」になると、車椅子の生活を余儀なくされ、日常生活に介護を必要とするようになります。また、神経系・免疫系に様々な病気を引きおこすため、白血病やがんにかかる確率は一般人の約八百倍から千倍にもなります。そして、多くの患者は、十代〜二十代前半までに呼吸不全またはがんにより亡くなるというとても怖い病気です。

いとこが四歳の時に、ふらつき、目の充血などの症状が出現し、七歳で「毛細血管拡張性運動失調症」だと診断されました。それからは自分の力では、立てなくなるようになり、リハビリと車椅子が必要となっていくようになりました。

いとこのお母さんは、この病気の治療法が無いので、チャリティーグッズを作り、その研究費を集めたり、寄付金でA-I-Tの治療法の説明をもらったりしています。取り組んでいるのは、それだけで無く、「毛細血管拡張性運動失調症」の詳しい情報をのせたホームページを作ったり、いろんなイベントに参加してその病気を知ってもらったり、同じ病気で苦しんでいる子供やその家族のためにメディアに出たりもしているのです。

私は、このようなことを通して、たくさん小さな子供達がいろいろな難病と戦っていることを知りました。そなたくさんの子供達のために募金などを少しでも入れていきたいと思いました。自分がだれかにサポートをされた分また

だれかをサポートして、助け合い、笑顔をわけ合うのだと思います。

私は、保育園のころ病気というものを知らなくて、年が経つごとに病気の死んでしまうリスク、その病気が治るリスク、などを少しずつ知りました。そして、現実を知るたびに、私も悲しくて苦しくなりました。私は、「その時になにかしていたら少しは違っていたのかな。」「どうしてなのかな。」「この病気が治ったらまたいろんな話をしながらいろんなことができるのかな。」と考えたりもしました。私も、こんなにたくさんの方のことを考えているのだからいとこのお母さん、兄弟などは、もつといろんなことを考えるでしょう。でもいとこは、どういう思いなのかなかなか家族に言えていないかもしれせん。なので私は、親には言えないような、なやみを聞いてあげたり、いとこの車椅子やくじけそうになったときに私が背中を押したりしてあげたり言葉をかけて少しでもいとこの役に立てたいです。

そして、治療法が早く見つかってまた元気になって、たくさんの方の思い出をこれから作っていききたいです。

思いやりの輪

むつ市立大湊中学校 二年 井上涼帆

今年行われた東京二〇二〇オリンピック・パラリンピックでは、さまざまな感動を私たちに届けてくれました。その中でも、私はあるボランティアの人の行動が心に残りました。

そのボランティアの人は、オリンピックの時に、陸上男子百十メートル障害に出場したハンスル・パーチメントという選手を助けたそうです。パーチメント選手は、国立競技場へ行く予定だったのですが、間違って水上種目の競技場に向かってしまったのです。バスで選手村に戻って別のバスで国立競技場まで行く時間はなかったのです。そんな時に、助けてくれたのが、ボランティアの人だったそうです。

パーチメント選手が、そのボランティアの人に助けを求めると、タクシー代を渡してくれたのです。もし私が、そのボランティアの人の立場だったら、咄嗟に機転をきかせて助けることはできないと思います。けれども、そのボランティアの人は、瞬時に状況をとらえて、相手を思いやり、そうした行動に移せて見事だと思いました。

実はこの話には続きがあります。なんと助けてもらった

パーチメント選手は競技に間に合い、そのうえ金メダルをとったのです。感謝を伝えるために、パーチメント選手はそのボランティアの人を見つけ出します。そして感謝を伝えたのでした。

私は、この話をニュースで知りました。ボランティアの行動も立派ですが、そのあとに礼をつくして、感謝を伝えました。パーチメント選手もすばらしいと思いました。

私は、この話を知って、自分自身がボランティア活動をしたときのことを思い出しました。そのボランティア活動は、学校のまわりの歩道を掃除するというものでした。学校のまわりの歩道は、落ち葉やゴミが多くあり、そのため少し歩みにくい状態でした。(少しめんどうだな。)などと、最初はボランティア精神など持ち合わせずに、掃除を始めました。落ち葉を集めるのに、想像していた以上につかれました。大変だと感じていたその時、歩道を歩いていた初対面のおばあさんに、

「お掃除、大変だけれど頑張ってるね。きれいにしてくれて、ありがとうね。」

と言われました。咄嗟に私は、「ありがとうございます。頑張ります。」

と言いました。その時、大変だというマイナスな気持ちだが、(この道を使う人のためにも、もっときれいにしよう。)と

いう、前向きな気持ちに変化しました。これがボランテニア精神なのだと感じました。

それからは、一所懸命、掃除をしました。（ここにゴミがあつたら歩きにくいな。）と考えながらしました。あつという間に時間は経ち、歩きにくかった歩道は、歩きやすくなれば歩道によみがえりました。声をかけてくださった、あのおばあさんにとつても、歩きやすくなったのではと考えると、うれしい気持ちでいっぱいになりました。

私のこのささいな体験は、パーチメント選手を助けたボランテニアの人ほど、センサーショナルなことをしたわけではありませんが、ボランテニアという相手を思いやる大切さを学んだ、貴重な体験でした。もつと世の中に、ボランテニアという思いやりの輪が、大きく広がったらいいと願っています。

自慢の妹

むつ市立近川中学校 三年 村 松 優 冷

私は今回「自閉スペクトラム症」について紹介したいと思っています。

みなさんは「自閉スペクトラム症」という言葉を聞いたこ

とはありますか。自閉スペクトラム症とは、対人関係が苦手だったり、強いこだわりをもったりといった特徴を持つ発達障害の一つです。私の末っ子の妹はこの発達障害をもっており、私たち家族がそのことに気づいたのは、妹が三歳になってからでした。特にこの発達障害のことを聞き、一番悲しんでいたのは母で、

「どうして気づかなかつたんだ。」

などと話していることを父から聞きました。

自閉スペクトラム症になる原因は、今でも不明だとインターネット上に書いてありました。私の妹の場合は生まれつきの脳機能の異常が原因だそうです。赤ちゃんの頃は、歩ける年齢になつても歩けず、話せる年齢になつても話せなかつたと母は言っていました。子育て経験者の祖母達の助言があつてそこまで不安はなかつたらしいのですが、保健師の勧めで病院に行くことにし、その診断結果で自閉スペクトラム症だとわかつたそうです。

私は父に言われるまで全く気づかずに接していたので、家族全員で集まり、妹のことを聞かされたときにはとても驚きました。妹であることに変わりはないので、今までと接方は変わりません。しかし、症状に合わせていくつか対策を行つています。

まずは、自分達が妹の発した言葉を聞きとれなかつた場

合、落ちついてもう一度聞くようにしています。また、慣れない場所に行くと他の子の場合、騒いだり、奇声を上げたりパニック状態になることがあるそうです。しかし、妹の場合、他の場所に行くとパニックを起こし縮こまってしまいうことが多いです。そのようなパニックを起こさないために、私達はよく手をつなぐようにしています。ただ、一般的な手のつなぎ方ではなく、妹の方が握るだけというつなぎ方になっています。ギュッと手をつなぐとかえってパニックになることが多いそうです。私はそのことを初めて聞いたので、最初はあまり慣れませんでしたが続けていると今では、妹から手を握るようになりました。姉としては、とてもうれしく思っています。

また、家でも工夫し、買い物に行っている時、万が一迷子になってしまったときのことを考え、小さいノートに自分が自閉スペクトラム症だということ、母の電話番号を書いて、常に持たせておくようにしています。

そんな妹ですが、この頃は自分の使ったコップやお皿などを自分で洗ったり、お米を炊いたり、身の回りのことを自分から積極的にやるようになってきていて、驚いています。

また、私の妹は自閉スペクトラム症の症状以外にもよく鼻血を出したり、アレルギーがないのに湿疹が出やすかったりと、様々な健康上の問題を抱えています。その症状に適した

薬に加え、睡眠薬や安定剤も飲んでいきます。妹はこのような、とても多い量の薬を毎日飲んですごしています。それでも、私達が夏休みの時などは、興奮して睡眠薬が効かなかつたことも多々ありました。私は多くの薬があるのに、嫌々言いながらも、きちんと飲んでくれる妹は立派だと思っています。

また最近、うれしいこともありました。妹は自閉スペクトラム症の自立支援施設に通っているのですが、そこで、自分から発言したそうです。はじめのころ、泣きながら行って、泣きながら帰ってきた妹を見てとても胸がしめつけられたのを今でも思い出せますが、今では、自分から進んで日直をしたり、他の子達にも話しかけたりしているそうです。

私は、これからも姉として、妹が困っているときにはよりそって面倒をみたいと思います。

パラリンピックから考えること

むつ市立大湊中学校 三年 外 崎 新

新型コロナウイルス感染症の影響により、予定より一年遅れの開催となった東京パラリンピック。テレビの中継で競技を観戦していた僕には、選手一人一人が輝いて見えた。

僕は、スポーツに対してあまり興味がない。だから、パラリンピックについては開会式があったということくらいしか知らなかった。しかし、そんな僕とは正反対に、父はスポーツ観戦が好きだ。期間中はオリンピックもパラリンピックも、毎日のようにテレビに釘付けになって見ていた。父の観戦していた競技を見てからは、それまで無関心だった僕も少し面白そうだなと感じ、それからは、時間があれば様々な競技を見るようになった。

僕の心に最も印象強く残っているのは、水泳の二〇〇メートル自由形で、見事金メダルを勝ち取った十九歳のブラジルの選手だ。その選手には両腕がなく、初めて見た時はどうやって泳ぐつもりなのだろうかと疑問に思っていた。しかし彼は自力で二〇〇メートルを泳ぎきった。僕は、その時の彼の泳ぎ方に衝撃を受け、そして心の底から感動した。

僕も一時期、水泳を習っていた。僕の頭の中での自由形は、一般的な考えのクロールだった。しかし、その常識は覆された。彼は全身を前後にうねらせ、その力で前へと進むのだ。しかも途中では、泳ぎ方を背泳ぎに変え、ラストスパイトで元の泳ぎ方に戻し、圧倒的な速さでほかの選手を寄せつけず、一位でゴールした。途中、泳ぎ方を変えたのは、背泳ぎにすることで体内に酸素を取り込み、後半に備えるためだったらしい。その泳ぎ方は、まさに、「自由」形だな、と

僕は感じた。

また、オリンピックにはないパラリンピック独自の正式種目として近年注目を集めるボッチャも心に強く残る競技だった。今大会、日本勢は個人で金メダルを獲得するなど、輝かしい成績を日本の歴史へ刻み、多くの人に感動をもたらした。

実は、僕の通う中学校では、ここ数年の球技大会でボッチャをやるのが恒例となっている。実際にやってみると、案外ボールのコントロールが難しい競技だが、他の競技とは違った駆け引きや戦術の奥深さなどが非常に面白く、とても盛り上がる。

大会での選手のプレイを見た時、鳥肌が立った。ジャックボールに近づけるのは当たり前、くつつける投球もいとも簡単にやってみせた。膨大な練習の成果とは言え、「かつこい」と、思わず口からこぼれてしまった。

パラリンピックに出場する選手たちは皆、身体に何らかの障がいを抱えている人たちだ。しかし世の中には、「障がいがあるのに、普通にプレイができてすごい。」と言う人がごまんといる。それは間違っている、と僕は思う。あくまで、彼らにとつては僕たちと何一つ変わらぬスポーツをやっているだけなのに、「障がいがあるのに」とわざわざ強調する必要性が果たしてあるのだろうか。まるで、元から障がいを持

つ人を自分とは別の人種かのように考える差別的な発言にしか聞こえない。

また、中には障がい自体を理由にいじめや差別を平気でする人がいる。僕は、そんな人間を許せない。そんなことでは、絶対に福祉であふれる世界など実現できるはずがない。

障がいを抱える人に対して、僕たちに大切なことは何か、それは支えてあげることだ。

「障がいも一つの個性」といったワードも最近ではかなり世に浸透してきている。しかし、それらの考えを無視、あるいは過度に捉える言動も見られているのが事実だ。平然と相手を困らせてしまう結果を生むような福祉などあり得ない。自分がするべきことは何かを改めてよく考えてみてほしい。そして、一人一人が行動へと移せるような世界になってほしい。それが実現したとき、福祉であふれる世界へと一歩近づくのではないだろうか。



佳作

バリアフリーとは

むつ市立近川中学校 一年 鍋 谷 圭

みなさんはバリアフリーという考えを知っていますか。バリアフリーとは、障がい者の方やお年寄りの人だけでなくすべての人が暮らしやすくなる社会を作るという考えです。バリアフリーは最近、広い色々なところで使われています。

ぼくの家にもバリアフリーがあります。部屋と部屋の間、段差が平らになっていたり、玄関の入口の段差がなく、坂道になっています。

そういったバリアフリーを僕はいつも何気なく使っていました。しかし、改めて考えると、部屋の移動が楽で、とても便利だと思いました。僕や、僕の家族が年をとっても、暮らしやすい家だと思います。

バリアフリーがあると、自分が使っても便利だと感じるの、障がいを持つ方やお年寄りに、とっては、なおさら便利なのではないかと、僕は思います。

最近ではバリアフリーは街中の色々なところでも見られます。例えば、エレベーターとかホームなど通路やトイレにもあります。歩くのを助けてくれたりボタンを押すのを助けてくれます。

僕はこういったバリアフリーが世の中にたくさんあれば、お年寄りや障がいを持つ方も、僕達一般の人も、暮らしやすくなると思います。

しかし、バリアフリーが付いている公共施設などは、現状あまり多いとはいえません。公共施設はもちろん、普通のお店にも多いとはいえません。

バリアフリーが使われているところで、例えば、通路の階段や少しの段差をスロープにすることで車いすの方や段差を上るのが困難な人が使いやすいようになるのです。

他には、エレベーターには、エレベーターのボタンの位置を低くしたり、エレベーターの中に鏡をつけたりするなどの工夫もされています。

また、そういった「物理的なバリア」を取り払っても、まだ問題は残っています。それは、バリアフリーを必要としない人の「意識上のバリア」です。

意識上のバリアとは、周囲の人の心ない言葉や、偏見、差別などのことです。例えば、「精神障害を持つ人は何をするか分からないし、おかしい」という偏見を持つこと、「障が

いを持つ人はかわいそう」と決めつけることなどが、意識上のバリアといえます。

僕は物理的なバリアに加え、そういった意識上のバリアを取り除く必要があります。そのために、私たち一人一人が障がいを持つことや、お年寄りのことを正しく理解し、寄り添う気持ちを持つことが大切だと思います。

点字ブロックの上に自転車を置く行為について聞いたことがあります。そういった行為も、それを必要としている人のことを正しく理解していないことが原因で起きるのだと思います。私たちにとって何でもないことも、障がいを持つ人にとっては大きな障壁になることもあります。その障壁を無くすためのバリアフリーがあるかないかで、生活する上での暮らしやすさは大きく変わるはず。

改めて、僕はバリアフリーは大切だと思います。町中では、バリアフリーを設置するための募金を見かけることもあります。みなさんも、他の人や自分自身の未来のために、協力してはどうでしょうか。みんなが暮らしやすい世の中を、みんなで一緒に作って行きましょう。

笑顔を広める仕事

むつ市立大湊中学校 一年 佐藤海翔

ぼくの母は、福祉施設で働いています。母は家に帰ってくると、毎日毎日たのしそうに笑顔で会社のことをしゃべりま

す。ぼくには、その母の姿を見て感じることはありません。利用者が笑顔になるように努める母の顔にも笑顔があることです。その笑顔はぼくの家にもよい影響を及ぼしていることにぼくは気づいたので。

ぼくは福祉の仕事はとていい仕事だと思います。なぜなら利用者も福祉施設で働いている人もみな笑顔になれるからです。

ぼくも母のはなしを聞いているうちに、福祉の仕事をしてみたいと思うようになりました。ですが、ぼくは初めての人は緊張してなかなかしゃべれません。たとえばしゃべれたとしても、ふだん友達としゃべっているような会話はできません。

一度だけ母の仕事についていったことがあります。利用者も施設の人もみんなぼくが思っている以上にとても優しく

たです。

母の仕事はとても大変でした。なぜなら自分で動ける人はいいけど、自分では満足に動けない人もたくさんいるからです。こうした職場なのに、よくいつも笑顔でいられるなどぼくは思いました。

ぼくは母に、なぜそんなにいつも笑顔でいられるのかを聞きました。そしたら母は、利用者に「ありがとう」といつも言われているからだよと答えました。

これを聞いて、ぼくは、笑顔の原動力は相手からのうれしい言葉や行動なんだということがわかりました。

母は仕事をいつもたのしんでいます。「利用者にもいろいろな個性があるので、とてもおもしろいんだよ。」とぼくにしゃべります。ぼくにとっては個性があるということは一入人接しかたを変えなければならぬのでとてもめんどくさそうにぼくには思えるのですが、母にとってはそうではないみたいです。

母は、毎日毎日のいろいろな人から「ありがとう」と言われるので、毎日笑顔でがんばれると口にします。そんな母をぼくは誇りに思うと同時に、見習って笑顔をふるまいたいと思っています。

祖父母への感謝

むつ市立大畑中学校 二年 佐藤 由奈

みなさんは、普段高齢者と関わることはありますか。家だと、両親、兄弟、ペットなどが多いと思います。

私の家は、三世代家族です。三世代家族を簡単に説明すると、親、子どもの他に、祖父、祖母が加わるということです。私の祖父は後期高齢者、祖母は前期高齢者で二人共七十歳を超えています。

祖父は、最近まで仕事をしていたので、とても元気です。しかし最近、私は祖父との関わりがうまくいっていないと感じています。話が一回で通じなかったり、うるさいと感じたりとイライラすることが増えました。だから、時に無視してしまったり、返事が適当になってしまったりしています。しかし祖父からのお年玉は毎年もらっているし、部活の送り迎えをもらうこともあります。だから感謝しています。

祖母は、料理や掃除など全ての家事を毎日こなしています。朝三時に起きて、朝食の準備をして、朝食を食べ終わると、風呂、トイレ、廊下の掃除を始めます。仕事はしていませんが、一日中暇ではありません。庭の草抜きや、野菜・花

の世話などやることがたくさんあります。夜は、夕食の準備、洗濯などがあり、遅いと十時過ぎに寝ることもありません。たくさん迷惑をかけているので謝罪と感謝をしたいと思っています。

祖父と祖母は私にとつてとても大切な存在です。祖父がいなければ、移動できないことがあります。祖母がいなければ生活することができません。普段の生活を見返すと祖父と祖母にはとてもお世話になつていると感じます。

家庭科の教科書に、一人暮らしの高齢者が増えているという内容がありました。そもそも家庭とは、家族の生活の場のことです。一人暮らしの高齢者にとつて家族団らんの場合といふものはどこにあるのでしょうか。楽しみは何なのでしょう。無いとは言い切れませんが、家族のいる方とは異なると思います。私は祖父母といる時間が長いです。祖父母と過ごす時間は大切だし、好きです。学校での出来事や友達のことを話すと、祖父母は楽しそうに聞いてくれます。私におかしなことを買ってきてくれます。心がとても温まります。そんな時間が一人暮らしの高齢者にもあつてほしいです。

私は、祖父母と毎日一緒に過ごしているので、方言やなまりなどがわかります。今の場所ですら暮らしているからこそだと思います。祖父母は私や姉をととても大切にかわいがってくれます。毎日の生活の支えになっています。今の私は、祖父母

のいない生活は考えられません。両親はとても忙しく、私も自炊しなければならなかったかもしれせん。改めて祖父母の大切さを感じることができました。感謝の気持ちを忘れずに、これから過ごしていきたいと思えます。本当に、いつもありがとうございます。

本当の優しさとは

むつ市立むつ中学校 三年 大 舘 姫 星

本当の優しさとは、自分自身の見返りを求めず、損得を考えずに、時には相手を突き放したり、とにかく相手のためになるような事をしてあげる事だと私は思う。ですが、優しさを親切や気遣いと勘違いしている人もいます。気遣いとは、相手に気分良くいてほしいという意味を持っており、親切とは、思いやりがあつて人のために尽くすという意味で、優しさとは違つて、決して相手のためになるような事ではないと思う。では、本当の優しさとは、どのような事なのだろうか。

私自身も、優しさを勘違いしていた事があつた。それは、学校で出された課題を、まだ終えていない人に見せるという事で、それは優しさではなくただの親切であり、何も相手の

ためになつていないと時間がたつてから私は気がついた。それと同時に、課題を見せる事を断るこそ、それが本当の優しさだという事にも気づかされた。もう一つ、優しさを勘違いしていた事がある。それは、悲しんでいる人を励ますという事だ。それも、本当の優しさではなく、ただの親切であり、何も相手のためになつていない。本当の優しさとは、悲しんでいる相手にただ寄り添うのではなく、その悲しみをどうやって解決するか、その悲しみとどう立ち向かつていくか、それを遠くから見守るのが本当の優しさだという事も。

そして、本当の優しさに気づかない事だつてあると私は思う。それは、親に叱られた時である。悪い事をしたら叱られるのは、当然の話だが、悪い事をしていなくても叱られる時がある。例えば、「掃除をしなさい。」や「家の事を手伝いなさい。」と親が子供を叱るという事である。私自身、小さい頃はこの事に対し、とても不満を感じていた。だが、今になってこのように親が叱ってくれるのは、本当の優しさがあつての事だと私は思う。あたりまえの事をあたりまえになせるように、大人になつて、誰も叱ってくれる人が周りに居なかつたとしても、自分を見失う事がないようにという意味があるのだと、成長してから気づかされたし、身近に本当の優しさで叱ってくれたり、注意してくれる人に感謝するべきだと感じた。

だが、優しさは、良い所だけが沢山あるのではなく、悪い所もあるのではないかと私は思う。人それぞれ顔が違ふように、本当の優しさの感じ方も人それぞれで、優しさの観点も人それぞれであるからだ。そのため、自分が優しさだと思つていた事が、実は相手の心に傷を作つてしまつていたという事もよくある。こういった事から、優しさは、相手の事をよく考える事も必要だと思う。

全員、本当の優しさを知つていたとしても、人と人同士の衝突はこれからはずつと避ける事ができないだろうと私は思うし、人と関わつていくという事はとても難しい。だからこそ、今までしてきた行動や発言を振り返つて、本当の優しさとは何か、という事を皆にも考えてほしい。そして、もつと沢山の人に本当の優しさを知ってもらい、沢山の優しさを周りに振りまいてほしい。

勇敢で誠実な者に

むつ市立大湊中学校 三年 吉 田 風 和

青森県は、大規模な自然災害が比較的少ない。だから、甚大な自然災害が起こることはほぼないだろう、そう安易にとらえて過ごしてきた。だが、そんなあまい考えが、今年の夏

に、私の中から一気に消えた。

私の学校では、定期的に学校周辺のゴミ拾いをするボランティア活動を行っている。正直な話、面倒で仕方ない。どうしていつもより早く登校して、わざわざ掃除をしなければいけないの？と愚痴をこぼしながら、私はボランティア活動に参加していた。挙句の果てには、私一人くらい居なくなつて影響しないんじゃないか？とか、こんなにたくさん的人数いる？とか、生徒会がやればいいじゃん！と、最低なことを考えてしまつていた（結果的に皆で綺麗に掃除できて嬉しくなるのだが）。

そんな私の今までの考えを一変させた出来事が、つい最近、夏休み中に起きた。全国ニュースにもなり、何度も私の耳に入ったし、映像が目に入りもした。そう、風間浦村豪雨災害だ。

私は、日常それほどニュース（テレビ）を見ない。見たとしても、いつもなら関心は高くない。そんな私の耳に入ってきたのは、下北、風間浦村などの身近な言葉。目を向けると、そこに映し出されていたのは、茶色い泥に行く手をはばまれた風間浦村の惨状だった。大雨にうたれ、土砂で埋もれたそこは、例えるなら、泥の海。私にはそう見えてしまつた。それほどのひどい有様だった。

目を奪われるほどに関心を抱いたのはそればかりではな

い。日頃、無関心な私の目を引きつけたのは、豪雨がおさまつた数日後の姿だ。風間浦村の村民達が不安な顔をしている中に、勇敢な顔と態度をした人達が含まれていた。その人達は、老若男女さまざままで、ボランティアによる災害支援者であつた。それを知つた瞬間、私は感動した。見たところ、風間浦村以外に住む多くの人達が、そのボランティアにたずさわつていた。なんてすてきな人達なんだ！そう思つた。

大雨で被災して数日経過しても、風間浦村豪雨災害の爪あとはまだ消えていない。大変だろうなあという風にしか思うことができない私。情けない……。そう思っていると、さらに、とてつもないくらいに私の目を奪つた出来事が！それは、ボランティア。え、さつきと同じ？いいえ、ちがう。今回想し出されたボランティアは、地元の高校生の姿だった。私が思つたことはただ一つ。たかだかゴミ拾いのボランティアですら面倒くさがつていた私とこの高校生のちがいは何？この方々はなんて素晴らしいんだろう！と、その高校生達は、嫌な顔なんて一つも見せず、ただひたすらまっすぐな思いで風間浦村の復興に向けて献身的に働いていた。まるでパーツをあてはめて行くように。こんな善良な人達に、私もなりたい。地域や皆を救いたい。そう思つた。

先日、私の学校で風間浦村の復興に役立たせようと、募金活動がはじまつた。私は募金にもあまり関心がなかつたのだ

が、迷うことなく募金に協力した。どうか、被害にあった地域や人々が災害前の幸せな日々を、いち早く戻れますように、と願いながら。

次の学校のボランティアはいつだろう。私は決めた。学校や地域のために、勇敢な態度と、誠実な心で、ボランティアに励むぞ！



第52回むつ市福祉作文コンクール 第8回下北郡福祉作文コンクール 応 募 内 訳

1. 小 学 校

No.	小 学 校 名	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
1	第三田名部	0	0	3	1	1	0	5
2	大 平	0	0	1	1	0	0	2
	合 計	0	0	4	2	1	0	7

2. 中 学 校

No.	中 学 校 名	1年	2年	3年	合計
1	田 名 部	5	1	7	13
2	む つ	5	2	14	21
3	近 川	2	1	3	6
4	大 平	2	3	0	5
5	大 湊	13	9	13	35
6	大 畑	5	5	2	12
	合 計	32	21	39	92

合計応募数

99 作品